

日中韓の木簡名称及びその対応関係

方 国花[†]

[†] 慶北大学校人文学院

キーワード：木簡、多言語化

Wooden Tablets in Japan, China, and Korea: Naming Conventions and Translations

Fang Guohua[†]

[†] Institute of Humanities Studies, Kyungpook National University

Keywords: wooden tablets, translation

はじめに

日本では、木片に文字を記したものを広く「木簡」と呼ぶ。韓国でも同じく「木簡」という用語を用いる。しかし、中国では竹に文字を書いたものを「竹簡」、木に文字を書いたものを「木牘」と称し、これを合わせて「簡牘」という。日本ではまだ竹に文字を書いた例が見つかっておらず、木を書写材料とするもの、言わば将棋の駒や曲物などにも、文字が書いてあれば木簡とする。ただし、正倉院などに伝来するもの以外は、基本的に発掘調査によって出土したものを木簡として扱う。

日本の出土木簡は既に 50 万点を超え、古代史を考える上で欠かせない資料となっており、「木簡学」という学問も成立している。一方で、同じく 50 万枚ほどの点数を所有する中国では、「簡牘学」という用語を使用する。（絹に文字を書いた「帛書」と合わせて「簡帛学」と称することもある。）ただ、学界では中国の簡牘学と日本や韓国の木簡学を合わせて「東アジア木簡学」と称することもある（角谷 2014）。本稿では、木製か竹製かを区別せずその総称とする際には「木簡」といい、必要に応じて「簡牘」、「竹簡」などの用語も使用する。

木簡学において、各名称は研究を進める上で大変重要である。日本の木簡は、内容や用途によって木簡を分類し、「文書木簡」や「付札木簡」のような名称をつけている。また、これを細分した名称も使用される。韓国は日本の木簡研究の影

響が強く、似たような名称を使うことが多い。しかし、中国は全く異なる。用途や形態、材質により、「札」、「簡」、「牘」、「両行」、「方」、「版」、「牘」、「槩」、「檄」、「検」、「觚」、「柿（柿）」などの専門用語が使われ、この道の人でなければ、理解できないものばかりである。

紙が普及する前の普遍的書写材料となる木簡は、日本では紙が普及し始めた奈良時代においても木の堅牢性、耐水性、簡便性などの特性が生かされ、多く使われていたが、その起源は何百年も前の中国秦漢時代ないし魏晋時代の簡牘に求められることが多い。また、韓国古代木簡はまだ600点弱で、その点数は少ないものの、7～8世紀を主とする日本木簡と使用年代が近く(6～8世紀)、形態や内容、記載方法も似ていることが多いため、日本古代木簡との比較対象となることが多い。

日中韓における木簡の出土例が増えるにつれ、比較研究の需要も増していく。しかし、現段階での研究をみると、日中または日韓の木簡の比較研究は多く見られるものの、日中韓三国の比較研究はさほど多くない。比較研究を深め、さらに広めるためには、まず各国における木簡・簡牘の名称及びその使われ方をしっかり理解しておく必要があるが、例えば中国の簡牘研究者の多くは、日本の木簡についての知識をあまり持っていない。しかし、中国においても「東アジア木簡学」に対しての関心が高まり、日本や韓国の木簡を研究しようとする人が増えているが、各国における用語に齟齬があり、歯がゆい思いをする人が多いと聞く。同じ漢字文化圏に属し、漢字を使えばなんとか通じるという先入観があるからなおさらである。実際に刊行されている木簡についての論稿やその訳本をみると、対訳の用語がバラバラで、正しい理解に繋がりにくくなっている。

そこで、本稿では文化財多言語化の視点で、日中韓における木簡・簡牘の用語を整理し、その対訳関係を提示する。そうすることで、東アジアレベルでの木簡の比較研究に役に立ちたいと考える。

1 材質別分類及びその名称

既に述べたように、日中韓においては同じく木材を書写材料としながらも、その名称が国によって異なる。表1で示したように、木を材質とするものは、日本や韓国では「木簡」とし、中国では「木牘」としている。竹を材質とするものは、日本ではまだ見つかっていない。韓国では、忠清南道泰安馬島近くの海域から見つかった沈没船で、いつ、どこの誰が何をどれほど送ったかという内容の記された、日本の荷札のような機能をする竹の札が発見されているが、これは「竹簡」

という用語を使えば、中国の竹簡が想起されるため、「竹札」という呼称を用いるとされている（林敬熙 2010）。中国の竹簡は、細長い竹の札を紐で編んですだれのようにしたもので、主に書物を書写するのに用いられる。韓国の竹札はその機能が中国の竹簡と全く異なるため、名称を異にしたのである。ただ、韓国では、この竹札をも含んだ意味で「木簡」と称しており、木簡を竹や木の書写材料の総称とすることが分かる。中国では、木牘と竹簡を合わせて「簡牘」とする。

「簡」は部首が竹冠であり、元は竹製であった。「牘」は「木」を縦に半分割った「片」が部首となっており、元は木製であった。即ち、竹の札が「簡」で、木の札が「牘」であった。そこで、「竹簡」と「木牘」という用語が生まれたわけだが、一方で、「竹牘」と「木簡」という用語もある。「竹牘」の「牘」は、木片という意味ではなく、はばの広いものを指す。反面、「木簡」の「簡」は、はばの狭いものを指す。複数行の文字が書ける幅の広い竹牘は実際に出土例もあるが、あまり普遍的なものではない。（例えば、中国湖北省の鳳凰山 168 号墓で 5 行分の書写面が作られ、4 行の文字が記された前漢時代の幅広の竹牘が出土した。）「木簡」は一行書きの、長さ 1 尺（漢尺の 1 尺の長さは約 23 cm）、幅 5 分（約 1 cm）の細長い木の札を指すこともあるが、木牘と竹簡の総称とすることもある。しかし、やはり中国では「簡牘」という用語を用いるのが一般的であり、「簡牘」といえば、日本や韓国ではない、中国で使われた竹または木の札を指すということが共通の認識となっている。これは多言語表記の際にも注意すべき点である。

なお、「簡」だけで竹簡と木牘の総称となる場合もある。中国では、秦代に使用された簡牘は「秦簡」、漢代に使用された簡牘は「漢簡」のように、「簡」の前に王朝名を付けることが多い。また、その前に地名を付すことも多い。例えば、湖南省龍山県里耶鎮から出土した秦代の簡牘は「里耶秦簡」、内モンゴル自治区の漢代に張掖郡居延県が置かれた地域から出土した簡牘は「居延漢簡」と呼ばれる。この場合の「簡」は木製と竹製を含んだ総称であり、「簡牘」の略称となる。

2 形状別分類及びその名称

木簡は木や竹をどのような形に加工したかによっても名称が異なる。書写面積を最大限にしたのが「編綴簡」・「冊書」（「冊」は「策」とも書く）である。これは細長い竹の札または木の札を紐で編んで、書ける文字数を増やしたものである。これを中国では「簡冊」・「簡策」とも言うが、日本と韓国では編綴された簡の例が見つかっておらず、「簡冊」や「冊書」のような専門用語よりは、その形状を示

す「編綴簡」という用語を使うことが多いように見える（対応関係は表2参照）。

中国では、竹簡は編綴して冊書の形で使用する場合の書写材料で、書籍や帳簿の書写に用いられるが、竹の生息しない辺境地帯においては仕方なく木の編綴簡を使用したとされる。日本では書籍や帳簿には紙が使われており、竹簡は紙に替わっていたため、編綴簡も竹簡も出土しないとされる。（富谷2014）

編綴簡と対称となるのが「単独簡」で、これは紐で繋ぎ合わせずに単独で使用する木の札をいう。日本や韓国で使用された木簡は全て単独簡である。その中で、書写面積を多く確保したものが、簡牘学の専門用語では「觚」と称される多面体の木簡である。多面体の形状をする木簡には「檄」と呼ばれるものもあるが、これは普通の簡よりも長く、封泥匣が刻まれているものもある（富谷2014）。特殊な形と言え、単なる多面体のものを指す「觚」とは異なる。そこで、韓国や日本の多面体木簡と対応するのは「觚」とすべきである。韓国木簡を中国に紹介した戴衛紅（2017）では、韓国の多面体木簡を「觚形」としている。

多面体木簡の形状は円柱状のものもあれば、3面または4面などの複数の書写面を持つ角柱状のものもある。韓国では、6～7世紀においては多面木簡または円柱形木簡が多く使用されるが、8世紀以降になると著しく減少するということから、多面木簡と円柱形木簡は韓国木簡を代表する重要な特徴の一つでされている（尹善泰2007）。

木簡の中で最も普遍的な形状は板状である。板状に切り込みを入れるか下端を尖らせるか穴を開けるなどの加工をしたものが多い。日本では、このような木材の加工の仕方や欠損状態を3ケタの数字で表し、18個の型式番号で日本木簡の形態を分類している（https://mokkanko.nabunken.go.jp/ja/?c=how_to_use#legend05を参照）。韓国でもローマ字や数字などによる形態分類案を試みられているが（例えば李在琬2019や金在弘2022等）、まだ定着しているわけではない。中国簡牘も番号による分類案が提示されているものの（高村武幸2012）、広く受け入れられているわけではない。ただ、本稿では日中韓の木簡名称を比較するのが主な目的であるため、このような番号などによる形態分類については、これ以上言及しないこととする。

では、再び板状の木簡についてみると、基本的に木目に沿って文字を書く縦長の形状であるが、木目が横向きになる横長の形状（「横材木簡」と称する）もある。日中韓において共に確認される例であるが、尹善泰（2007）はこの形状の木簡を「方形木簡」と称する。

中国では、板状の木簡を長さまたは幅によって違う名称をつける。「簡」、「牒」

と「札」は長さ約23cm、幅約1cm、厚さ0.2～0.3cmの1行書きのものを指す。「両行」は長さは変わらず、幅を1.8ないし2.8cmにした2行分の文字が書けるものを指し、「牘」はもう少し幅の広いものを指す。「方」、「板」と「版」はさらに幅を広げて、縦横の長さがほぼ同じになり、つまり四角に近い形になるものを指す。長さを2尺にしたのは「檄」、3尺にしたのは「檠」であるとされる（大庭1979・1998）。中国戦国時代の礼儀書である『儀礼』に「方」は5行、7行または9行書くことと記され、湖南省にある嶽麓書院所蔵の秦簡に「牘」は5行を超えてはならないと書かれ、広さまで規定される。これほど細かく規定するということは、中国において、簡牘の大きさは礼制にかなわなければならない、大変重要であったことが分かる。一方で、日本の木簡にはそのようなきちんとした原則はなかったらしく、長さも幅もまちまちである（鬼頭1990）。韓国木簡も同じである。

なお、木簡を再利用するためにその表面に書かれた文字を刀子（小刀）で削り落としたものを日本では「削屑」と称するが（大庭1998）、中国では漢代からの古典に記された「杝・杝」（「こけら」の字）という用語を使う。一方で、簡牘研究がはじまってからの用語となる「削衣」（銭存訓1957に既にこれについての定義が見られる）もよく使用されている。韓国では、日本の「削屑」という用語の影響を受けて、その漢字音で表記した「삭설（削屑）」という用語を用いることが多い。また、「屑」を意識した「부스러기」を使い、その後に漢字表記も付した「목간부스러기（木簡削屑）」という用語も使われている（尹善泰2007）。他方で、「屑」という漢字が韓国国内ではあまり使われていないものとして「削片」という用語を用いる場合もあるが（李鎔賢等2022）、やはり前者の用語の方が一般的である。

このように、国によって木簡の使用された時代が異なり、事情も異なるため、使われている名称にも違いが見られる。表2でまとめたように、日本と韓国は似た形状の木簡が多く出土し、用語も類似している。他方、中国の簡牘学における名称は、古典の影響が強く、礼制の規制により大きさを使い分けるなどしている。つまり、韓国と日本には中国の簡牘文化の一部のみが引き継がれていると言える。

3 内容・用途別分類及びその名称

木簡の各形状の中で最も多くを占めている板状の木簡は、書写する内容やその用途により更に細かく分類されることがある。日本の木簡は、内容により「文書木簡」、「付札木簡」、「その他」に大きく分けられるが、文書木簡は大概短冊形を

しており、付札木簡は大体上下端の両側に切り込みを入れたり、下端を削ってとがらせたりしている（鬼頭 1990）。ただ、これは大まかな傾向であり、全てがこれに当てはまるとは限らない。たとえば、短冊形の付札木簡もある。「その他」に含まれている木簡には「習書・落書木簡」、「呪符木簡」などがあるが、これらの木簡は「習書木簡」と「落書木簡」を別の分類範疇とする場合や、呪符木簡を文書木簡の範疇に入れる場合などがあり、分類方法が一定的ではない。その一方、木簡の機能による新しい分類案も提示されている（渡辺 2014）。しかし、現段階では「文書木簡」、「付札木簡」、「その他」に分けるのが最も一般的な分類法であり、本稿もこれに従う。

日本の木簡は7～8世紀を最盛期とし、その種類もこの時期が最も豊富であるが、木簡を記載内容・用途別に細かく分類し、詳しく説明をしているものとしては、古代木簡の集大成となる木簡学会（2003）を挙げることができる。しかし、本書は従来の分類案と若干違うところに注意が必要である。本書は「荷札」を別の分類範疇とし、狭義の付札を「その他」に入れ、物品のラベルのような役割を果たす広義の付札と区別している。だが、日本の木簡を中国と韓国の木簡と比較するためには、従来の分類案通りにしたほうが便利である。そこで、本稿では大きくは従来の分類案に従いつつ、木簡学会（2003）によるラインアップに基づいて表3のような一覧表を作成した。なお、日本の木簡の各名称は、中国と韓国の木簡の名称と全て対応するわけではないため、ここでは対応関係のある中韓木簡の名称及び異なる漢字を用いる対訳のみを一覧表に反映した。

紙幅の関係上、表3に示した名称を全て説明することはできず、特に説明を加える必要があるものについてのみ詳述する。

3.1 召喚状・召喚木簡・召文木簡

「召喚状」・「召喚木簡」・「召文木簡」と呼ばれるものは、役所が役人を呼び出す際に使用したものであり、「役所+召+役人+用件+日付」の書式で書かれることが多い。「召」という字が使われることで、「召文」または「召喚」と称している。「召喚」とは普通裁判所が被告人・証人などに対し、日時・場所を指定して呼び出すことを意味し、韓国でも同じ意味で使用されている。他方、中国では、口頭で人を呼ぶことを「召喚」という。そのため、「召喚状」・「召喚木簡」の漢字表記をそのまま中国語に当てることはできない。康昊は市大樹の論文を翻訳する際に「召見」という用語を用いているが（市 2014）、「召見」には上司が部下を呼び出すという意味があり、まさに召喚木簡の「召喚」と意味が似ているため、訳語と

してぴったりである。ただ、康氏の「召喚木簡」を「召見他人木簡」と訳す部分については、召喚される対象が「他人」となっており、ニュアンスが少し変わってしまう。もし、「召見木簡」とのみ訳すと、呼び出される対象が木簡のように見え、落ち着きが悪い。本木簡が「召文」とも呼ばれる文書木簡であることを考えると、「召見文書簡」と訳すのが良いと考える。韓国語訳も中国語訳と同じ漢字表記を使い、「소견문서목간（召見文書木簡）」にしておく。

3.2 郡符木簡

郡符木簡は、中国と韓国の木簡に同じような例がなく、対訳としてはそのまま「郡符木簡」になるが、「符」の字は簡牘の名称としては「割符」を意味し、「郡符木簡」の「符」とは全く意味が異なる点に注意が必要である。つまり、簡牘の「符」は、1本の竹または木の札をあらかじめ二つに割り、半分ずつを別々に持っていて、関の出入りなどの際に札の側面に入れた切り込みを照合させて、互いを認証するのに使うものである（大庭1998）。他方、「郡符木簡」の「符」は、文書様式の一つで、いわゆる下達文書に用いられる。そして「郡符」は、軍司が郷・里やその他管轄機関に対し命令を下した文書である。そのため、日本木簡に対する知識をあまり持っていない簡牘研究者は、「郡符木簡」についての詳しい説明がない限り、その用語を理解できないのである。つまり、このような用語の多言語表記は、説明文を加える必要が生じる。

3.3 出挙木簡

「出挙木簡」は、稲や金銭などを貸し付け利息を取っていた、古代の出挙制に関わる木簡のことである。これに該当する木簡が中国や韓国にも出土している。中国では「長沙呉簡」または「走馬楼呉簡」と呼ばれる、湖南省長沙市の古い井戸から出土した三国時代の呉の簡牘群に、利息の付く穀物の貸与と返納に関するものが含まれている。關尾（2014）は、これを出挙に該当するものとしながらも、後代の法制概念である出挙を用いることは控えたいとし、「貸与簡」・「返納簡」と称している。韓国では「佐官貸食記」の文言が記された木簡が百済の旧都となる扶余の双北里遺跡から出土しているが、その内容及び記された文言が日本の出挙木簡と類似し、注目されている。「貸食」という文句は、中国の走馬楼呉簡における、關尾（2014）で「貸与簡」とされる木簡にも共通するため、共に「貸食簡」と称される（戴衛紅 2014）。内容が類似するこれらの木簡は、鄭東俊（2014）でも行われているような日中韓の木簡の比較によって、それぞれの資料の性格を一

層明らかにすることができる。ただ、その名称は国、または研究者によりまちまちである。本稿で試みているような名寄せを通じて、東アジア木簡学を一層広めることができるであろう。

3.4 封緘木簡

紙の文書を挟んで封印するための木簡を、日本では「封緘木簡」という。2枚の同型の木簡、または、上端から途中までを未使用の割り箸のように表裏2枚に剥いだ木簡の間に文書を挟み、その上端ないし上下両端に切り込みを入れ、切り込みのところに紐をかけて縛り、その上から「封」「印」などと墨書し、時には宛先を書いた木簡である（大庭 1998）。似たような木簡が韓国でも発見され、同じ漢字表記を使用し、「봉함목간（封緘木簡）」と呼ばれている。他方、中国の場合はこのような役割を果たす簡牘を「検」と呼ぶ。「検」は用法により「封検」と「書検」に大別できる。「封検」とは、中身が開いたり露われたりしないように封じるための簡牘であり、時には封泥で封印されたものを指す。「書検」とは、文書が送られる官庁等の宛名を書くための簡牘であり、文書を封じる時には、表に宛名も書かれる（大庭 1998）。そうすると、日本の「封緘木簡」は簡牘の「検」の中の「書検」に機能が通じると言える。ただ、「検」は封泥を入れるための匣が付く場合が多く、形態は日本の「封緘木簡」と大きく異なる。

なお、「実物検」とも呼ばれている「封検」は、「楬」と同じように、この簡牘を付けた物品の内容や所属などを示す働きをするもので、「楬」に封泥匣が付いたものともみられている（鷹取 2014）。

3.5 付札木簡

日本の「付札木簡」と同じく、物品のラベルの役割をされると言われている簡牘が「楬」である。「楬」は、多くの場合は上部にまるみをつけ、その部分を墨で塗りつぶしたり、網目状に墨の線をひいたりしている（大庭 1979）。多くは、木の札の上端または下端の両側に切り込みを入れたり、下端を尖らせる形に整形した日本の付札と形態が異なる。他方、韓国の「꼬리표목간（附札木簡）」の形は日本の付札によく似ている。

広義の付札は、普通物品の管理や保管用に付けられる狭義の「付札」（「物品付札」ともいう）と地方からの調・庸などの貢進物に付けられる「荷札」（「貢進物付札」ともいう）に分けられる。（なお、狭義の付札には鍵に付けられる「キーホルダー木簡」と呼ばれるものもある。）

広義の付札はよく、「楊」に該当すると言われているが、鷹取（2014）で指摘されているように、「実物検」にも同じ機能があり、機能面では「実物検」も付札に対応すると言える。中国語訳はラベル・タグを意味する「標籤」を使用した「標籤簡」でも良いが、簡牘専門分野では「簽牌」という用語を使うことが多いため、「簽牌」を推奨する。ただ、「簽牌（日語中稱為“付札木簡”）」のように、元の用語を付けておいたほうが良いと思う。韓国語訳はラベル・タグを意味する「꼬리표」に漢字表記の「附札」を添えるのが一般的である。

狭義の付札は広義の付札の名称が同じであるため、「物品付札」とも呼ばれている。その中国語訳も同じく「簽牌」に「物品」を付した「物品簽牌」に、韓国語訳は「물품꼬리표（物品附札）」にすると良い。

「荷札」は、貢進物に付けられるということで「貢進物付札」とも呼ばれているが、その訳語は表3に掲げたように様々である。韓国では、「荷札」の韓国漢字音を用いて「하찰（荷札）」とすることも多いが、その用途を示した「세금공진용（税金貢進用）꼬리표」という名称にすることもある。中国の簡牘でいえば、荷とともに運ばれる荷札は、倉庫・文書庫に保管する場合に付けられた整理の標識だとされている「楊」（「物品付札」に該当）（富谷2014）とは区別した方が良い。その中国語訳はいろいろあるが、貢進物を意味する「貢品」を付した「貢品簽牌」に「荷札」をカッコ書きで添えた表記が最も良いと考える。

おわりに

以上、本稿では日中韓の木簡の名称及びその対応・対訳関係について述べた。ただ、本稿は日本木簡の立場で書いたものであり（特に表3）、対等な関係にはなっていないことを断っておく。韓国木簡は日本木簡と使用年代も形態も近く、対照表は比較的作成しやすかった。他方、中国簡牘は紙木併用時代の日韓木簡と違い、大半は簡牘使用時代のものであり、使用年代と使用背景に大きな差がある。また、名称の付け方も古典文献や簡牘資料に記されているものを中心とするため、同じ俎上に載せるのは容易ではない。そのため、中国語訳は日本語と1対1の関係にはならなかった。本文でも触れたように、中国語訳は日本の木簡の機能、内容、形態などの面に分けて論じる必要がある。

日中韓の木簡が研究レベルで比較検討されることが多いが、本稿は多言語表記の視点で専門用語の対応・対訳関係を論じることが目的であり、木簡研究の幅を広げ、さらに深めることに役に立つものと信じている。ただ、本稿では紙幅の関

係上、言及内容が木簡関連用語の一部にとどまることを断っておく。データを拡充していくとともに、木簡の増加により、また研究の進歩により、修正していくことを今後の課題とする。

参考文献

- 市大樹（康昊沢）（2014）「日本古代木簡の視覚機能」、角谷常子編『東亞木簡學的構建』所収、汲古書院
 大庭脩（1979）『木簡』、学生社
 大庭脩（1998）『木簡：古代からのメッセージ』、大修館書店
 鬼頭清明（1990）『木簡』、ニュー・サイエンス社
 金在弘（2022）「韓國 古代 木簡の 分類 方案」（韓國古代木簡の分類方案）『木簡과 文字』（木簡と文字）28号
 角谷常子編（2014）『東アジア木簡学のために』、汲古書院
 關尾史郎（2014）「穀物の貸与と返納をめぐる文書行政システム一斑」、角谷常子編『東亞木簡學的構建』所収、汲古書院
 錢存訓（1957）『中国古代書史』、香港中文大学吳
 戴衛紅（2014）「중, 한 “대식간 (貸食簡)” 연구」（中韓“貸食簡”研究）、『大東文化研究』88号
 戴衛紅（2017）『韓國木簡研究』、廣西師範大学出版社
 鷹取祐司（2014）「古代東アジアにおける付札の展開」、角谷常子編『東アジア木簡学のために』所収、汲古書院
 高村武幸（2012）「中国古代簡牘分類試論」、『木簡研究』34号
 鄭東俊（2014）「백제 대식제 (貸食制) 의 실상과 한계」（百濟貸食制の実情と限界）、『역사와 현실』（歴史と現実）91号
 富谷至（2014）『木簡・竹簡の語る中国古代：書記の文化史』（増補新版）、岩波書店
 木簡学会（2003）『日本古代木簡集成』、東京大学出版会
 尹善泰（2007）『목간이 들려주는 백제 이야기』（木簡が聞かせる百濟の物語）、周留城
 尹龍九・李鎔賢・李東柱（2022）『韓國木簡總覽』、周留城
 李在院（2019）「한국 출토 목간의 분류와 정리 및 표준화 방안」（韓國出土木簡の分類と整理及び標準化方案）、『木簡과 文字』（木簡と文字）23号
 林敬熙（2010）「마도 1 호선 목간의 분류와 주요 내용」（馬島一号船木簡の分類と主要内容）、『태안마도 1 호선 수중발굴조사 보고서』（泰安馬島一号船水中発掘調査報告書）、国立海洋文化財研究所
 渡辺晃宏（2014）「墨書のある木製品とその機能：東アジア木簡学の確立のために」、角谷常子編『東アジア木簡学のために』所収、汲古書院
 奈良文化財研究所『木簡庫』（<http://mokkankano.nabunken.go.jp/ja/>）

付録：日中韓木簡名称対照表

I
論
考

表1 材質別分類及びその名称

	日本	韓国	中国
木製	木簡	木簡	木牘
竹製	×	竹札	竹簡
総称	木簡	木簡	簡牘

表2 形状別分類及びその名称

日本	実例	韓国	実例	中国	実例
編綴簡 ＜冊書＞	×	편철간 (編綴簡) ＜책서 (冊書)＞	×	＜簡冊 (策) / 冊書＞	◎
単独簡	◎	단독간 (單獨簡)	◎	單獨簡 / 單簡	◎
多面体 / 角柱状 / 円柱状	○	다면형 (多面形) / 막대형 (棒形) / 원주형 (円柱形)	◎	多棱形 / 棱柱形 ＜觚 / 檠＞	◎
板状	◎	판형 (板形) / 장방판형 (長方板形) / 세장형 (細長形)	◎	条状・片状 / 板状 ＜簡・牒・札 / 兩行 / 牘 / 方・板・版 / 槧＞	◎
削屑	◎	목간부스리기 (木簡削屑) / 삭설 (削屑) / 삭편 (削片)	◎	削衣 ＜梳・柿＞	◎

＊×は実際の用例がないことを示し、○は用例が少ないことを示し、◎は用例多数であることを示す。なお、＜＞を付けたのは簡牘学における専門用語を表す。

表3 日中韓木簡の内容・用途別名称対応・対訳表

	日本		韓国	中国
典籍			전적목간 (典籍木簡)	典籍簡
文書	文書木簡		문서목간 (文書木簡)	文書簡
	様式別	進上状		(物品) 献上木簡
		請求状		
		召喚状/召文木簡	소견목간 (召見木簡) / 소견문서목간 (召見文書木簡)	召見文書簡
		郡符木簡		
	記録関係	伝票木簡	전표목간 (傳票木簡)	單據簡
		帳簿木簡	장부목간 (帳簿木簡)	簿籍簡
		兵衛警備/門号木簡	문호목간 (門號木簡)	
		出挙木簡	대식목간 (貸食木簡)	貸食簡/貸與簡/返納簡
	内容・用途別	考課木簡		
		告知札		告示牌 <扁書、檠>
		画指木簡		
		禁制/制札		禁令牌
		題籤軸	제첩축 (題籤軸) / 권축용목간 (卷軸用木簡)	
		棒軸	목침축 (木籤軸) / 봉축 (棒軸)	
		封緘木簡	봉함목간 (封緘木簡)	<檢/書檢>
		過所木簡		過所/通行證 <檠/傳>
		門籍木簡	부신용목간 (符信用木簡)	<符/名籍>
		門膀木簡		<符>
		膀示木簡		膀示牌
		物忌札・蘇民将来札		
		呪符木簡	주술・의례용목간 (呪術・儀礼用木簡) / 주술목간 (呪術用木簡)	數術簡/術數簡/符咒牌/符咒木簡
付札	付札		꼬리표 (附札)	簽牌/標簽簡 <榻/実物檢>
		付札/物品付札	물품꼬리표 (物品附札) / 꼬리표 (附札) /	附札/物品簽牌 <榻>
		キーホルダー木簡	열쇠꼬리목간 / 열쇠 부찰 (附札)	鑰匙牌
		荷札/貢進物付札	세금공진용 (税金貢進用) 꼬리표/하찰 (荷札)	貨札/貨簽/貢品附札/ 貢品簽牌 <実物檢>
その他		習書・落書	습서목간 (習書木簡) / 습서용목간 (習書用木簡)	習書簡
		歌木簡	和歌木簡	和歌木簡

* < > を付けたのは簡牘学における専門用語を表す。空欄になっている箇所は対応関係のある木簡がまだ発見されていないか、対訳に同じ漢字表記をそのまま使えるものである。なお、太い線で囲ったものは、その分類範疇の総称である。